×の不思議な魔法の絵本

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
×の不思議な魔法の絵本

【Ｎコード】
Ｎ６１０５Ｍ

【作者名】
麻生柚葉

【あらすじ】
“×”と共にめくるめく空想絵本の世界へ。コトリが古本屋で手にした一冊の本。表紙には“×”の文字。中身は『×の不思議な魔法の絵本』と書かれそれ以外は白紙。変な本だと思っているうちに本の中に吸い込まれて・・・？

×'s Fantastic The Magical Book

春麗らかな過ごしやすい日。
古びた窓からの明かりが穏やかな風と共に静寂を包んでいます。

ここはとある街の寂れた古本屋の一角。
とある一人の少女が居ました。
凛とした気品感じる佇まいに、どこか少し気だるげな雰囲気。
前髪で陰るその横顔からは何も読み取ることが出来ません。

「凄く、変な絵本・・・」

彼女の手には一冊の絵本。
どうやらその絵本を興味深げに眺めているようです。
黒を基調としたシンプルな色合いに手に滑らかな装丁。
絵本と言うには少し分厚いページ数。
そして、不恰好な文字が一文字書いてありました。

「×・・・バツ？」

まるで後から書き加えられたように書き殴られており、あまりにも
不恰好で酷く滑稽にに見えます。
他に文字は見当たらず、作者の名前もありません。

“×”と言うのがこの絵本のタイトルなのでしょうか。
本当に不思議で可笑しな絵本。
少女は背表紙を撫でながら首を傾げました。

「しかもご丁寧に鍵付きだなんて。」

まるで何かを封印するかのように、まるで何かを守るかのように付いた鍵穴はまるで日記帳の様。
ハートをあしらったデザインで可愛らしい感じになっていました。
鍵は見当たりません。

「だけど、鍵は・・・あら?開いて・・・る・・・わね。」

面白半分に留め金を弄っているとカチャリと音を立てて外れました。
鍵付きといっても開いたまま鍵が無くなったのでしょうか。
鍵がかかっている様子は無く、簡単に留め金が外れるようになっているようです。

留め金を弄っていると、ふと少女はどこからか視線を感じました。
しかし周りを見渡しても傍には誰も居ません。
少し離れたところに店主が居るようですが転寝をしているようです。
気のせいではありません。

彼女の勘がそう告げます。
観察するような、そしてどこか楽しみを見つけ出そうとでもいうような好奇の目

あえて・・・
あえて言うなら、この絵本からの視線

開く事が出切るのか試しているといわんばかりの・・・

もう一度少女はキョロキョロと辺りを見渡すと他の目が無いことを確認してから、絵本を開くことにしました。

『×の不思議な魔法の絵本』

最初のページにはタイトルなのでしょうか。
表紙の不恰好の“×”の字と同じように書き殴った様に書いてありました。

「×の不思議な魔法の絵本？　魔法のファンタジー物なのかしら」

パラパラと捲ってみると、そこには白紙のページばかりが続いていました。
最初のページの書き殴り以外は文字も絵も無く全て真っ白です。

途端に少女は拍子抜けしました。
少し身構えていた自分が馬鹿みたいです。

「何この本。不良品じゃない。その名の通り本当にバッテン印なのね。・・・この“ペケ”」

思わず呟いてしまったのはこの際仕方ないと思っていただきたい。
きっと彼女の心の底からの本音ですから。

大きく一つため息をつくと、少女は棚に戻すべく絵本を閉じようとしました。

しかし絵本は閉じようとした思いに反して、まるで本当に魔法にかかったようにページをかってに捲りだしました。

そして二ページ目でピタリと止まると、絵本は少女の手を離れ宙に浮かび上がると光輝いていきました。
段々強くなる輝きと共に浮かび上がる題名と同じ筆跡の手書きの文字。

目次

序章　“×”と不思議と魔法の絵本

その文字が浮き上がるのが早いか、眩しさに目を閉じるのが先か
そのまま光はどんどん増していき、少女は誰にも気付かれること無く光に飲まれて消えてしまいました。

後に残ったのは何事も無かったかのように床に落ちた絵本。
魔法ではなく、自然に吹いた風でページが揺れました。

始まりはいつも突然に
“×”それは物語を読む為の魔法の呪文

Next Page　Chapter00. “×” and Fantastic and The Magical Book

Chapter00. “×” and Fantastic and The

目を開けて感じたのは落下感。
そして目に映るものは、無常にも綺麗に晴れ渡り広がる青い空でした。

「落ちてる・・・落ちてるわ。」

取り乱した様子も無く、少女は冷静に状況を判断します。
いや、突飛な状況に思考が停止しているのかもしれません。
どちらにしろ、ふわふわした髪を靡かせながら少女は重力に任せて下に下にと落ちていきます。

どんどん、どんどん止まる事無く落ちていき
どんどん、どんどん少女の姿は小さくなっていきます。

あぁ、大変。少女の落ちる先には・・・

そして聞こえたのは下敷きにされ潰された者の無残な悲鳴と豪快なビンタの音

Ｃｈａｐｔｅｒ００．“×”ａｎｄ Ｆａｎｔａｓｔｉｃ ａｎｄ Ｔｈｅ Ｍａｇｉｃａｌ Ｂｏｏｋ

「痛い・・・」

くっきりと頬にモミジをつけた青年が頬を摩りながら言います。
底が見えず光の無い、どこか虚空を映すような目をしているのにまるで少女は射抜かれているように感じました。

強い視線に少女はたじろぎます。だけどこの視線は

――さっき感じた視線ではない・・・わね。

“勘”そう何の確信も無い不確かな物だけれど
少女は未だ自身を裏切ったことの無い直感を信じるべきだと思いました。

少女の思考が少しずれた事に気が付いたのか、青年はが怪訝そうに片眉を上げました。

「スイマセン。少しびっくりしちゃって。ははは。」

「何故お前が俺を殴るんだ。一応助けてやった事になるだろう。
恩を仇で返しやがって・・・むしろこっちが殴りたいくらいだ。」

少女は淡々と話す青年に冷や汗を流しながら目を逸らすしか出来ません。
思わず出た笑いも乾いていく一方です。
下敷きにした時の顔の近さに驚いたからといって一方的に手が出たのが少女の否なのは彼女自身が一番よくわかっており、無言の圧力の居心地の悪さに縮こまってしまいます。

しかし、青年の言葉だけを見ると怒っているのに酷く抑揚の無い声で話す所為で、抗議が薄っぺらに聞こえます。
本当に彼は怒っているのでしょうか。
表情は無表情に近く、言葉は棒読みです。
言い換えるならば、酷くやる気が無さそうな大根役者。

そんな少女の気持ちを読み取ったのか、青年は胡散臭くやれやれと盛大に大きなため息を一つ吐き出しました。
頑張ってその意思を読み取るなら諦めたように、または呆れたようにでしょうか。

「全く・・・」

雪にも負けないほどの白い肌、サラリと流れる艶やかな細い髪に整った鼻筋。
華奢ではあるがスラリと伸びた体躯はまるでモデルのようです。

だけど、一番に印象に残るのは得体の知れない威圧感が感じられる・・・目。
全てを拒絶するかのように、凍てついてしまったかのようにその視線はどこか冷たい。

――折角美形なのに・・・勿体無いわ。
そう少し残念に思うのは乙女の性なのでしょうか。
感情の篭っていない棒読みな喋りが輪をかけて台無しにしているようにも思います。

――いや、そんな事よりも状況把握が先。

「あ、あの・・・」

「このままでは一向に次のページに進めないな・・・
良いか、説明するぞ。ここはお前がさっきまで見ていた絵本の中だ。そして俺は簡単に言うとその絵本の主。」

少女が沢山の疑問をぶつけようとするよりも早く、先読みしたように少女の疑問の答えを青年は説明しだします。

「絵本の中？そんな非現実な事あるのかしら。」

いきなりの話題転換に目を白黒させながらも、しっかりと切り替え話についていける少女は機転と頭の回転が良いらしい。

「書いてあっただろう。“魔法の絵本”と。
魔法がかかっているからお前はいきなり違う場所に居るし、あんなに高い所から落ちたのに怪我一つ無い。」

「・・・」

「信じてない、信じてないな。
こんな分りやすい不思議体験をしているというのに・・・」

少女は空想や魔法、そう言った類の物を全く信じていません。
信じるものは己と、しかと現実するもの。

――しかし、この状況は？
冷静に判断するにも知覚は捕らわれたままで・・・

「まぁいい、続ける。発動条件は俺の名前を呼ぶことだ。お前は俺を呼んだから引き込まれたんだ。」

「そう。貴方名前なんていうの。」

「ペシュエルリッヒアードルフッヴォアリエボルツォーニ＝ケーネアルドロヴァンディーニブッシネロ」

「・・・はい？」

――今、何て言いました？

あまりの文字の羅列の多さに思考がついていきません。
発音に高低は全く無く、一定のリズムで紡がれた声がさらに拍車をかけます。

「だーかーらー、ペシュエルリッヒアードルフッヴォアリエボルツォーニ＝ケーネアルドロヴァンディーニブッシネロ。
ちなみに苗字は別にあるから。」

「一体何の呪文ですか、それは。私はそんな長ったらしい呪文は唱えてないのですけど。」
予想通りの名についての少女の反応が気に入らないのか、長い名前の青年は不貞腐れたようにそっぽを向いてしまいます。

「俺の名前だって言ってるじゃないか。それに呪文なんかじゃない。

・・・・・略してペケだ。
ご丁寧にも表紙に“×”って書いてあっただろう。」

――　何この本。不良品じゃない。その名の通り本当にバッテン印なのね。・・・この“ペケ”――

「あっ」

「ほれ、俺の事呼んだだろう」

「それは、有りなの？　りゃ・・・愛称じゃないの。」

略では可哀相な気がしたので気を使って愛称と言い換えました。
愛称でも不憫なのは変わらないという思いを飲み込みつつ、愛称は親しみをこめて呼ぶ呼び名。
表現的にはこちらの方が良いかと少女は思いました。
気分の問題です。

「いや、有りだからお前が今ここに居るんだろうが。諦めろ。」

対するペケはさして気にしてないように興味なさそうに、相変わらずの棒読みのまま言います。

「ペケの不思議な魔法の絵本・・・ね、じゃあこの状況は全て貴方の所為と言うことなのかしら？」

「全て・・・と言うには語弊がある。
確かに俺はこの絵本の主だ。俺が司っている部分は多く、そして重要だ。
しかし、俺イコール絵本ではない。別物だ。
絵本無くして俺は存在できないし、俺無くして絵本は存在することはできないが、意思とは別という事だ。」

「ふぅん。じゃぁ、貴方が原因ではなく貴方の所為でもない。
私が手に取った魔法の絵本が原因であり、偶然だけど魔法の絵本を発動させてしまった私の所為。」

「そういうこと。」

俺も説明とかやれば出来るな。などとペケは呟いていますが、最初から説明する気が無さそうな棒読みで言われても説得力がありませ

ん。
全ては少女の理解力と、冷静にそして柔軟に対応できるおかげでしょう。

「私の所為・・・と言うのは納得できないし不本意ね。」

「あぁ、ならばそれは鍵娘の所為だ。アレがこの本の鍵を開けた。
誰かが迷い込むのを期待して・・・だ。」

ペケは良い案を思いついたとでも言うようにポンっとわざとらしく手を叩きました。

「鍵娘・・・さん？」

「鍵を持つ少女だ。奴が発動条件の一つを外して簡単にした。
だから奴の所為にすれば良い。」

「誰なのよ。その人は。」
そう言いながらも一つの可能性が少女の頭に浮かび上がります。

「さぁな、俺もよくは知らないが、魔法の絵本は古本屋に来る前は鍵娘の持ち物だった。
奴も最初は気に入ってこの絵本を何回も読んでいたのだが、もう飽きたらしい。
今度は、誰かがこの絵本を読んでいるのを見ようと考えたんだろうな。運悪くお前はそれに引っかかった。」

「・・・そうね。」

眉を寄せて俯きながら少女は考え込みます。
もしかして、あの時の視線の送り主はその“鍵娘”で近くで見ていたという事になるのでしょうか。

だけど・・・

――あの視線は絵本からの視線に思えたのだけど。

――という事は今も彼女はどこかで見ている？

しかし、視線はあの時以来感じません。

深く考えれば考えるだけ分らない。
鍵娘のしようとすることも、この可笑しな体験も、目の前に居るペケの存在も全てが。

少し納得出来ない所はあります。
この全ての出来事は案外単純に出来ている。
考え込むよりも、すんなりそれを受け入れることがそれが一番の正解だと根拠も無く少女は思いました。

ならば・・・

「そうかもしれないわ。」
ゆっくりと顔をあげた少女は迷いの無い強い瞳をしていました。
「それはすんなり納得するんだな。」
ペケは少女の態度に内心驚きましたが、表情には出さずに言いました。
今まで幾人もの人を見てきたかは分りません。
この少女は、その中のどのタイプにも当てはまらずとても面白い。
この絵本の住人や鍵娘にも負けず劣らずの本質の形・・・

――この娘は久しぶりの大当たりだ。

「・・・心当たりがあるわ。絵本を弄っている時視線を感じたの。
きっとその人のものね。」

「それは凄いな。奴はかくれんぼが得意だから気付くのは相当難しいのに。」
見直したぞ。と嬉しくも無い言葉を少女は貰いました。

「分っても視線だけでは嬉しくないわ

・・・ペケ」

「ん？」

真剣に少女は言葉を紡ぎます。
そして言葉に誓いを立てます。

「受け入れましょう。この出来事を。この不思議を。
そしてその“鍵娘”の挑戦受けてたちましょう。
彼女が何を思っているか知らないけれど、私は試されている。
ならば、有無を言わさず納得させれば良い。私結構負けず嫌いの性質なの。」

そういって、彼女は不敵に笑いました。

02

『そうだ。進め、そして思考しろ。
見つけろ。気付け。そして言葉にしろ。』

暗い暗い奥底で何者かが呟きます。

『面白い面白い。　・・・これは実に面白い。』

だから、だから・・・・

だから、早くここから・・・

「“どうして”は分ったわ。次は肝心の“どうすれば”よ
貴方の絵本なんでしょ？どうにかできない訳？」

ゴツゴツと歪な形の岩ばかりしか無い周りを見渡し、丁度良く座れそうな岩を見つけ出すと少女は腰を下ろしました。

それにしても、この場所は見渡す限り荒れ果てた荒野が広がるばかりです。
少し先には乾涸びた砂漠があり、草も木も動物も居ません。
そして、青く青く澄み渡る空には鳥一匹見当たらず、生命に関わりあるものが感じられません。
完全なる、絶対の沈黙が支配していました。

絵本の中というと、もっとメルヘンチックなお花畑やら、想像上の生き物が闊歩していたりしても良さそうなものだが絵本と言うにはとても寂しく感じる場所。
しかしペケにメルヘンチックな背景は全くと言って良いほど似合わないし、
メルヘンな物が苦手な少女にとっては、こちらの荒野のほうが好みで目には優しいと感じてしまいました。

「そうは言っても、俺の役割は序章だ。
次の章に進んで、そのまま絵本を読み終えろとしか解決策は言えないな。」
ペケは少女の前に服が汚れるのも気にせず胡坐を掻きます。

「序章？読み終える？どういうこと」

「んー。絵本の中って言ったろ。
“今この場所”は序章のページ。俺がお前にこの本の事を説明すると言う内容のお話。
俺の説明が終われば、次の一章のページに進める。

読む、次のページへ。読む、次のページへ・・・この繰り返しで最後まで読む。おーけー？」

「おーけ？　・・・あぁ、ＯＫね。大丈夫。
ようは入り口が最初のページ、出口が最終ページって事ね。
物語を最後まで読むまでは途中退室不可。
次に進まなければ絶対に元には戻れない。って事でＯＫ？」

「おーけー！」

グッっと効果音が付きそうな仕草でペケは親指を立てました。
ご丁寧にもウインク付きで。

・・・酷く似合わな過ぎて残念な気持ちになったのはここだけの話です。

「・・・で？さっさと序章の続き説明してよ。」

「ん？もう無い。終わり。」

さも当然とばかりに言い切ります。

「序章は『“×”と不思議と魔法の絵本』という副題がついている。
“×”である俺と出会って、“不思議”体験を経験し、後は“魔法の絵本”の説明。
　そのまんまな副題。ほら、終わりだろ。」

そして言葉と同時に“序章　Ｆｉｎ！”と描かれたブロック状の色

鮮やかな文字がペケの後ろに浮かび上がりました。
ネオンの様にテカテカと光瞬き、心なしか後ろからエンディングっぽいメロディが聞こえる気がします。

・・・ふざけているようにしか見えないのは気のせいでしょうか。

「・・・・・・。
ちょっとそれは、何？」

引き攣った顔を隠そうともせず後ろの物を指差しながら少女は言います。

「ちょっとは、魔法の絵本っぽい所を見せてやろうと思って。
凄いだろ。魔法。全部俺の思い通り。」

「そう、貴方想像力が皆無なのね。可哀相に・・・」
「うるさい。ファンタジーとか信じてない奴に言われたくない。」
「ファンタジーの住人の癖してその想像力よりはまし。」
「・・・・・・・。」
「・・・・・・・。」

矢継ぎ早に言い合った後、思わず無言で顔を見合わせてしまいました。
その際、相手を見る目が可哀相な者を見るような目になりましたが、お互い様です。

「まぁ、そんな事はどうでも良い。それで、俺はお前の名前聞いて

ないんだけど。」

やはり、ペケはさして気にしてないように興味なさそうに、相変わらずの棒読みのまま言います。

「そういえば、そうね。私はコトリよ。一応・・・よろしくお願いします。」

「ふぅん。“小鳥”か。随分中身の本質に似合わず可愛らしい名前じゃないか。」

ワザと発音を変えて馬鹿にしているのか、心なしかニヤニヤしている（ように感じる）ペケに思わずコトリは殴りかかりますが、意外に素早い動作であっさり避けられてしまいました。

「このペケ！」

「ん？それは俺を呼んでいるのか、それとも貶してるのか？」

「それは貴方のお好きなようにとってください。」

そんなペケとのくだらないやり取りに、案外やっていけるのではないかとコトリは思いました。

最初は絶対にペケとは合わないだろうとコトリは思っていましたが、ペケの大根役者っぷりも、棒読みも、変人っぷりも慣れればどうって事ありません。

むしろ、ペケの突飛な行動が面白いと思うようになってしまいました。

「ほら、小鳥ちゃん。次の章に進むんだろ？」
そう言ってペケは立ち上がるとおもむろにコトリに手を差し出しました。
どうやら、呼び方は“小鳥”に決定したようです。
「えっ？」
「一人じゃ寂しいだろうから、俺が特別に付いて行ってやる。」
面白いと感じたのはペケの方も同様で
何も映さない瞳に少しだけ輝きが見えた気がします。

ペケはコトリの手を取り立ち上がらせると、いつの間に現したのか
一つの何の変哲も無い・・・
しかし反対側の無い“扉”を開けると先の見えない闇にコトリを放り投げました。
そして、その後自身も飛び込んで行ったのでした。

さぁ、一緒に読もうではないか
次の物語がお嬢さんのお気に召せば幸いにございます。

Next Page

Chapter01. Illusion

Of Magic

Chapter01. Illusion Of Magic

「ああ、・・・またなの・・・」

コトリが感じるのは落下感。

しかし、前回と違うのは目の前に広がるのは漆黒の暗闇で傍にペケがいる事でしょうか。

景色が変わらない所為か、二回目でもう既に慣れてしまったのか、コトリが恐怖感を感じる事はありませんでした。

ペケが一緒に居る所為でしょうか。もうどうにでもなれとコトリは最早諦めムードです。

「良く見てみろ。もうすぐ着くぞ。」

自分の思考に耽っていたコトリにペケは下方を指差して言います。つられてコトリは指の先を見ましたが、目には何も捉えることはできませんでした。

「何にも見えないわ・・・ん?」

コトリはペケに抗議しようと彼の方に視線を戻すと彼の背後に違和感を感じました。

暗闇の中に穴が開いたように色が一つあることにコトリは気が付いたのです。

――あれは何かしら？
そう疑問に思っているとどうでしょう、ほんの一瞬の間にその色が一気に暗闇を食い尽くしてしまいました。

「だぁから、もう着くんだって、小鳥ちゃん。次のページに。」

自然な動作でペケがコトリの手を取ると落下感が落ち着き、ふわりと着地することが出来ました。
コトリの背中とお尻の下にはふかふかな感触。
慌てて周りを見渡すと沢山並んだ椅子の真ん中辺り、丁度特等席に当たる位置に座っていたのです。
その隣の席には勿論ペケの姿。

そして、目を白黒させているコトリの前には赤の垂れ幕がさがった舞台の劇場が広がっていたのでした。

Ｃｈａｐｔｅｒ０１．　Ｉｌｌｕｓｉｏｎ　Ｏｆ　Ｍａｇｉｃ

中々の規模の劇場なのにも関わらず、周りを見渡しても観客はペケとコトリしか居ません。
これから人が入ってくるのでしょうか？それにしても静か過ぎます。

「ねぇ、何なのここは？」
「何、と聞かれても・・・ここが一章の舞台なんだろう？」
一見何の変哲も無い劇場ではありますが、気が抜けません。
忘れてはいけません。なんせここは現実ではなく、何でもありな絵本の中なのですから。

「じゃぁ何が始まるのよこれから」
「ん？あぁ、はいどうぞ。」
いつの間に用意したのか、ペケは手に持ったパンフレットを差し出してきます。
軽くお礼を言って受け取ると、コトリは早速それを開いてみることにしました。

一面にはかっちりした衣装に身を包み、片眼鏡の好青年がシルクハットを片手に微笑んでいます。
駆け出しの新人マジシャン・リトの初舞台！
華々しいデビューを飾る、心躍る公演の開幕です。

どうやら手品のマジックショーが演目のようです。
コトリはあまり興味が無い類のものですが、嫌いではありません。
いくら摩訶不思議な現象が起こったとしても、絶対に仕掛けがあるエンターテイメントなのですから。
それに、ざっと経歴や公演内容に目を通し謳い文句を見る限りは中

々面白そうな公演ではあります。

・・・それにしても、

「“魔法の絵本”なのに内容が、種も仕掛けもあるマジックで良いの？」

「何を言う、種も仕掛けも無いからマジックなんじゃないか。
よく言うだろ、種も仕掛けもありません！って」

「・・・」

この男は本気で言っているのでしょうか。
真顔で（と言っても表情が代わり映えしないので何とも言えませんが）言いきるペケにコトリは脱力してしまいました。

どんなに奇想天外で不思議な実現不可能な事をマジシャンがやってのけても、必ず仕掛けがあります。
錯覚や思い込みを利用して、人を騙し驚かせ楽しませる。これがマジックです。

いや、ここが絵本の中だから現実とは定義が違うのかもしれません。
もしかしたら魔法を使った盛大なエンターテイメントなのかもしれないと、そうコトリは思いました。

「まー、いいや。そろそろ始まるぞ。楽しみだなぁ！」
「はっ！？　ちょっと待ってよまだ全然お客さんなんて入って無いじゃない。

こんな大きなところに私達だけよ！」

「ん？居るだろう、そこかしろに沢山。いっぱい過ぎて満席だ。」

何を言っているんだと当たり前のようにペケは言います。
見渡してみても人っ子一人存在しません。
ペケの瞳にはその存在が映っているのでしょうか。

まさかと思いコトリは試しに隣の空席に手を翳してみるもやはり空を掴むだけです。
これは幽霊とかオカルト的な何かなのでしょうか。
コトリは全く見えないのでそんなものは信じていませんし否定派です。
しかし、見えるという人の否定だけはしません。
コトリにとってのリアルではなくても、その人にとってはそれがリアルなのですから。

「俺は見えないがな。きっと居る・・・んだろうな・・・たぶん。」

それは居ないと同義では無いかと思いましたが、コトリは黙っている事にしました。
ペケが変な言動をする事は会って間もない短い付き合いですが何となく分かります。
そして全うな常識を説いても通じません。
いちいち突っ込まずにそういう事にしておいた方が気持ち的に楽です。

“ここは絵本の中”そう自分自身に納得をさせてコトリは深く椅子

に座りなおしました。

ペケとコトリの話し声以外音の無い空間にブザーの音が鳴り響きます。
二人は会話を止め、舞台に視線を集中させました。

さぁ、いよいよ、ショーの開幕です。

果たして、観客の二人しか居ない新人マジシャンのデビューショーはどうなるのでしょうか。

04

「ううむ。やはり手品にはウサギをシルクハットから出現させる・・・

・

これが最低限必要だとは思わないか。」

眉を潜めながら一人の新人マジシャンが一人呟きました。

まだ幕の上がっていない壇上に立ちながらマジシャン・リトは右往左往に歩き回りながら大きな問題にぶち当たっていました。

はっきり言いましょう、彼はステージマジックが大の苦手です。

それなのに、パンフレットにはいかにもな感じでイリュージョニストとして紹介されてしまったのです。

それは何故か。

彼の雇い主が派手好きだからに他ありません。

何を期待しているのか、それともマジシャンと言う物を勘違いしているのか・・・

雇い主は大掛かりな仕掛けの物がお好みのようでした。

人体浮遊？脱出？人体切断？

とんでもありません。

リトが得意とするのはクロースアップ・マジックであり、彼はカー

ディシャンなのですから。

しかし、やらなければならない状態に立たされた今、逃げ出す事は叶いません。
確かに苦手ではありますが、これでもリトはマジシャンの端くれ。
ジャンルが違うマジックの勉強や研究も沢山してきました。
簡単なものなら出来ない事も無い

・・・はずです。きっと。

「王道かつ定番だが・・・やはりステージマジックには欠かせない存在だ。
ウサギ・・・ウサギが必要だ。急いで探して来なければならん。」

「ねぇねぇねぇっ！何処に目をつけてんの？目の前に居るでしょ。立派なウサギちゃんが！」

リトの独り言を傍にいた小さなピンク色の子が拾いました。
ピンクの子・レネットはリトの周りを跳び回っています。

「おや、ウサギ？お前がかい？」

レネットの言葉に心底意外そうにリトは言いました。
視線をレネットに合わせてみるものの、いかんせん・・・

「真ん丸くって可愛げも無いし・・・お前はどう見てもウサギには見えん」

リトは多少考える素振りは見せましたが、結局軽くあしらいました。レネットの事をリトはウサギではなくぴょこぴょこと飛び跳ねている真ん丸い物体としか思えませんでした。

「可愛げが無いって・・・酷い！
この丸い体がキュートでしょ！何でこの可愛さが分らないのかしら。」

「しかし・・・なぁ」

リトは自分がステージに立ったと事を想像してみました。
自分の手にはシルクハットそして隣に立つのはレネット・・・
案外、奇妙な形の喋るウサギという事で人気が出るかもしれないとリトは思いました。

しかし・・・

「アタシの可愛さにお客さんは拍手喝采よ！」
拍車をかけるようにレネットは叫びます。

「そうかい？そこまで言うのなら、お前で試してみようか」

不覚にもリトが雇い主の相違に気が付いたのはつい先ほどの事で
用意し練習してきたマジックが使えないと気付いたのも本の数時間
前の事です。
実はもう本番は間近に迫っていました。

時間は止まる事は無く、無情にももうすぐこの目の前の幕は上がり
ます。
一つも派手なマジックが無いのは無謀だろうと、苦し紛れの出現マ
ジックなので他に良いウサギを探す時間はもう無いのでしょう。
リハーサルをする暇さえ無いのですから。

やれやれ
言葉にこそ出さなかったが、面白半分でやってみようとリトは準備
を始めたのでした。

・・・頭を掠める不安に蓋をして。

０４（後書き）

＊用語解説

イリュージョニスト　大掛かりな仕掛けの“イリュージョン”と呼ばれるジャンルのまっじくをする人

ステージマジック　大人数の観客に対してステージ上で演技する事

クロースアップ・マジック　少人数の観客に対して至近距離で演技する事

カーディシャン　カードマジックを得意とするマジシャン

05

さぁさぁ、待ちに待った幕が上がります。
観客、出演者、それぞれの不安を抱えつつ一体どんなショーになるのやら・・・

『Ｌａｄｉｅｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍｅｎ！
今宵は我がマジックショーにお越しいただきありがとうございます。』

初めてと言うのを感じさせない堂々としたマジシャン・リトの声が劇場に響きます。
緊張に固まるわけでなく、優雅に挨拶をこなす様はまるでもうベテランのよう。
しっかりと前を見据えたその顔にはマジシャンとしての誇りが見えました。

観客席からは二人だけのささやかな小さな拍手が聞こえます。

「思ったよりも好青年ね。」

「何だ、あれが小鳥ちゃんの好みのタイプか？」

ボソッと思わずコトリの口から出た言葉にからかうようにペケは小声で言います。

コトリはリトを捕らえていた目を逸らしペケに向けるとしっかりと横目で睨みつけます。

「・・・少なくとも、ペケよりはね。」

「・・・・・・・」

実の所、顔だけ見るならペケのほうが好みのタイプなのですが、わざとらしい棒読みな喋りや難有る性格でマイナス点です。
コトリはからかわれた事を逆にお返ししてやろうと思ったのですが、何とも反応し難い無言で無反応でした。

『さて、まず初めにお見せいたしますのは・・・』

くるりと手首を回すとリトの手には潰れたシルクハットが現れます。
次に逆の手を振るとどこからともなくステッキの姿が。

ステッキでシルクハットを元の状態に戻し卓上に置くと中からトランプを取り出します。
リトはカードを扇状に開き、シルクハットに落としたかと思えば、今度は何も持っていないはずの手からトランプを出し扇状にして見せました。

それをまたシルクハットに落とすとまたトランプを出して・・・
鮮やかな手つきで消したり増やしたりしてみせます。

そして一度カードを全てシルクハットに治めると、パンパンと手を払う様に叩き観客席に手に何も持っていないことを伝えます。
手を一振りすると右手に、そして左手にトランプが現れました。

「おおー！」

相変わらず棒読みの声がコトリの隣から聞こえます。
こんなのはプロにしてみれば初歩のマジックだろうとペケを盗み見てみると、珍しく驚きと期待でキラキラ顔を輝かせていました。
・・・いえ、周りに本当にキラキラしたものが浮かんでいました。
良く見るとペケはいたっていつも通りです。
ペケのほうがよっぽど不思議な事をしていると言う言葉を、ため息を一つするだけでコトリは飲み込む事にしました。

『お次は、このシルクハットから色々と取り出してみる事にいたしましょう。』

リトはシルクハットを逆さまにしたり放り投げたりして何も入っていないことを見せるとステッキを振ります。
小さい紙ふぶきから始まり、色とりどりの花や細い風船、そしてハトとシルクハットをステッキで叩くたびに段々と華やかに・・・
何の変哲も無いシルクハットから色々なものを取り出して見せました。

わぁ！と思わず声をあげる観客二人。
歓声も拍手も迫力に欠けるのはご愛嬌です。

『続きましては、おしゃべりな真ん丸ウサギ・レネットの登場です！』

「ちょっ、ねぇウサギって喋るの？」
リトの言葉が気になってしまったコトリはペケに小さく耳打ちします。

「なんたって、マジックだからな。」
「いやいやいや・・・」

――それはマジックでどうにかなる問題じゃ無いでしょう
いささか現実主義のコトリは興が冷めてきたのに対し、ペケの周りの輝きがより一層やかましいくらいに輝きだしました。
随分レネットに期待しているようです。

そんな煩い観客をおいてリトのショーは続きます。

ステッキをバトンのように回し、シルクハットをコツンと叩きました。
その時、シルクハットを見るリトの表情に初めて不安が出て来た気がしました。

「・・・え？」

その表情にコトリは疑問を覚えました。
何故でしょう。
今までシルクハットから色々なものを取り出してきた彼が不安に思

うところが分かりません。

そしてリトはシルクハットに手を入れます。
そのまま勢い良くレネットが出てくると思われましたが
片手にシルクハット、もう一方の未だ本体が見えないレネットの耳を持った手がピクリと止まってしまいました。

一体どうしたのでしょうか。
その動きに観客である二人は首を傾げます。

あんなに堂々としていたリト顔が一瞬だけ強張り

『・・・・・・はぁ』

すぐに呆れ顔に変えると、リトはため息を一つ。

その後、いくらリトが頑張って振り回してもピンクの長い耳が見えるばかりでレネットはシルクハットに見事につっかえ抜けませんでした。

06

多少の失敗ならどうにか持ち直す事も出来るでしょうにリトは話術で回避しようともせずに諦めムードです。
流れていた音楽はいつの間にか止み、舞台上と観客席に微妙な空気が流れ始めました。

嫌そうな顔をしてリトはレネットの耳を掴みながらブンブンと力任せに振り回しています。
ショーの最中と言うのを忘れているのでしょうか。
完全に周りを無視している状態です。

『痛い痛いっ！暴力反対！！』

くぐもったそんな声がちらほら聞こえますが、リトは全く気にしていないようです。
奇妙な形に変形しているシルクハットに無言の圧力がかかります。

『きゃーあ！目が回るーう・・・』

「失敗しちゃったわね。それに完全に微妙な空気なのに幕は下りないし・・・」

「あーあーあーあーあー

俺は何も見て無いし、俺は何も聞こえないんだ。」

ペケはコトリそっちのけで顔を両手で覆い舞台を見ないようにして、声を出して聞こえない振りを貫こうとしています。

その様子はまるで子供です。

さっきまであんなに周りがキラキラしていたのに、今では嘘のように無くなってしまいました。

「はいはいはい。現実から目を逸らすのはやめましょうね。」

一体これからこのショーはどうなるのでしょうか。

彼のデビューは失敗になるのでしょうか。

――まぁ、観客が二人だけのショーだけどね。

人知れずコトリは笑いました。

『きゃー』

『む、』

すっかり舞台から注目を逸らせていたコトリでしたが、ふと今まで無言を貫いていたリトの声が耳に入り舞台の方に向き直りました。

舞台上には観客席の方を、いえ観客席の遥か頭上を見詰める手ぶらのリトの姿がありました。

リトの視線をたどると空を飛ぶシルクハット。

その曲線状の辿り着く先をコトリが理解する前に・・・

「あっ」
「ん？」

ペケの頭に思い切り良くぶつかってしまうのでした。

「ぐっ・・・！」
「きゃー痛いー！」

柔らかそうなので特に怪我はなさそうですが、顔を手で覆っていたから避けられなかったのです。彼の自業自得でしょう。
ペケは縮こまりながら頭を押さえつつ唸りを上げ、レネット入りのシルクハットは床に転がっていました。

それにしても、前回コトリの下敷きにになるなんて事もありました実はペケは避雷針なのかしらと思った一人我関せずなコトリなのでした。

＊＋＊＋

「ぷはーっ、苦しかったわ！」

大の男が二人係で踏ん張ってようやく抜けたレネット。
反動で尻餅をついている二人をよそに抜け出せて至極嬉しそうです。

変わりまして、場所は舞台上。

コトリはシルクハット入りレネットを片手にペケの苦情は全てスルーして彼の首根っこを掴みながら引きずって舞台上に上がりました。コトリはリトに苦笑しつつも軽く挨拶を交した後、無理矢理ペケにレネットを押し付け、リトと共に救出させた所です。

一人ムスーっと地面に座ったまま胡坐をかいているペケを放っておいてコトリはリトに話しかけます。

「大丈夫ですか？」

「あぁ、大丈夫さお嬢さん。ご心配ありがとう。」

立ち上がりコトリに苦笑を寄こすリト。その表情には疲れと諦め色が見えました。

その姿は先ほどまで舞台上で輝いていた人とは思えないほど覇気がありません。

「それと随分とお見苦しい所を見せてしまったね。申し訳ない。」

「えっ？いえ、そんな事は・・・」

慌てて言葉を探すも語尾が尻つぼみになってしまいました。

そんなコトリに、嘘だと分かっていてもありがとうと苦笑ではなくふわりとリトは笑いました。

硬い口調に似合わず丁寧な物腰の違い優しい雰囲気の人のようです。

その人が良さそうな笑みにコトリは少し、安心感と共に親しみやすさを感じました。

そんなほのぼのとした空気が流れる中、それをぶち壊すように

「ふんっ！」
そっぽを向いたペケが憎たらしく鼻を鳴らします。
そんな様子のペケを横目にリトは苦笑を深くしてしまいました。
――このペケ！もう何やってんのよ、馬鹿！
空気の読めないペケの反応にコトリは思わず叫びそうになったのを必死に飲み込みました。
どうせ、注意したところでこの男には意味の無いことでしょう。
それどころかオブラートに包まない言葉が飛び出すに違いありません。
気まずい空気が流れるとコトリは焦りました。
が、しかし空気を読めないのはこの場にもう一人・・・
「もぅ、リト！リトの所為で失敗しちゃったじゃないの！！どうするのよ！
それにアンタ達！アタシの存在無視しないでよね。プンスカ！」
舞台に良く通るソプラノが響きます。
ピョコピョコ跳ねながら、レネットは全身で怒りを表現しているようです。
ため息を一つつき、それを煩わしそうに見てリトは言いました。
「仕方ないさ、お前はおデブさんだからな。」
「酷いわ！アタシの所為だって言うの？それに、レディに向かってそんな事！！
そこのアンタもそう思うでしょっ」

「・・・えっえぇ、そうね」

突然レネットに話を振られコトリは口の引き攣り感じますが押し切られる形で精一杯返します。

先ほどまで意識してレネットの方を見なかったと言うのに、コトリは思わず視線を向けてしまいました。

長い耳だけ見ていればウサギの様な気もしますがレネットの全身はウサギには到底見えず、奇妙で真ん丸。

変な物体が・・・良く言ってぬいぐるみが喋っているようにしか見えません。

やはり、ここは非現実過ぎます。

そっぽを向いていたはずのペケも興味があるのか飛び回るレネットから視線を外しません。

そしてレネットのこの性格

人の話を聞かないと言いますか、何を言っても無駄になりそうな雰囲気

着いていけないテンションに、自分が常識と言っているような態度見ていると諦めたくなるこの心境。

性格や雰囲気は全く似ていないのですが、周りを振り回し苦労させるこの一番厄介なタイプは・・・

――これはどっかの誰かさんと・・・

コトリは自然とため息が零れ落ちるのが分かります。

そして、それは隣に居るリトも同じようで。

自由すぎる変な相方に振り回され苦労しているのは自分だけでは無いと、リトとコトリは不思議と親近感を感じてしまうのでした。

07

ペケはレネットの動きに合わせて無意識に目線だけでなく頭が動いているようでした。
見ているだけならとても微笑ましく見えます。
レネットの方も自分が注目されているのが嬉しいのか、どこか楽しそうです。

そんな二人を横目に見詰めながら苦労人二人は話を続けます。

「ねぇ、失敗を持ち直さなくても良かったの？」
「・・・良いんだ、こうなりそうな予感はしていたのだ。」

「え？」

「どうせ、ここで失敗しなくても次で失敗していただろう。
元々、大掛かりなマジックは苦手なのだよ。それに・・・

こんな“本質”なのに、夢を諦めきれない我輩は愚か者なのさ。」
「・・・本質？」

「この馬鹿リトっ！それでもやるって決めたのはアンタでしょ！
そんなにすぐ諦めるんじゃない！」

ペケと戯れながらもしっかり話を聞いていたのか、激しく憤りながらレネットは思い切りリトのお腹目掛けて体当たりしました。
しかし軽いからか衝撃は無いらしくふら付きもせずキャッチされて

しまいます。

「随分手厳しいなお前は。」

「リトがヘタレすぎるのよ！もっと心意気見せて男前になりなさい！！」

「ちょっと待って。

ねぇ、“本質”って何なの？リトさんがマジシャンになるのに何か問題がある物なの？」

「本質とは・・・

「本質とは人が持って生まれた性質だ。必ず一人に一つ持っている物だ。

一人一人の秀でたものや特徴と言い換えても良いだろう。

俺にも、小鳥ちゃんにも、こいつ等にも“本質”は存在する。」

・・・と言う物だね。」

失礼にもペケはリトの言葉に割り込んで説明しました。

どうして態々・・・とコトリは思いましたが、ペケが仲間外れ反対の文字を背負っているのを見て納得しました。

無視した事を根に持っているのでしょうか。

相当の寂しがりやのようです。

「持って生まれたもの・・・」

「例えば、本質が“不変”な奴も居れば“回避”だったり“不運”などもある。

それからは、絶対に逃げる事は出来ない。投げ出す事が出来ない。

そしてそれに縛られるんだ。」

「それが、我輩にとっては実に厄介なのだよ。お嬢さん。
さて、お嬢さんは我輩の“本質”が見抜けるかな？」
リトはコトリに挑戦するように笑います。
そんな笑みを目の当たりにしてコトリは目を丸くしてしまいました。
行き成り何を言い出すのでしょう。

「見抜くってどうして・・・」
「当てないと、次への扉は開かないぞ」

――　へっ？

「ちなみに他の章も同じ法則だ。章の“本質”を何の物語なのか当てないと先に進めない。
我輩のは分かり易い。だから練習にはもってこいじゃないだろうか」

「そうだな。だからお前が一番最初なんだろ。」
置いてけぼりなコトリの脳内は晒している間抜け面と逆に高速で回転させました。

――冷静になるのよ。コトリ。飲まれちゃ駄目。
冷静出ない時に考える事なんて碌な事しか浮かばない。それが彼女の持論です。

――落ち着いて考えれば絶対大丈夫。
しかし、リトの“本質”を考える前にこれだけは言っておきたいの

です。

「そんな事聞いて無いわよ、ペケ！」

「あれ、言ってなかったか？それはすまない。」

鬼の形相でコトリはペケを睨みつけるも、怯む事無く平然とあっさり返されてしまいました。

その態度に怒る事はしません。

何故ならコトリにとっての最重要はこの得体の知れない絵本から出ることなのですから。

コトリは考えます。彼の動きや彼との会話を思い出してみます。

不躾にもジロジロとリトを観察すれば、ニコニコと笑顔を返してくれました。

大掛かりなマジックは苦手であるけれどリトの夢はマジックをする事。

舞台や人前に立つのに影響する本質ならあんなにも堂々とした振る舞いは出来ないでしょう

必ず“失敗”するならば最初のカードマジックも成功する事は無いでしょう。

『魔法の絵本』の登場人物にも関わらず、“魔法使い”ではなく“マジシャン”の訳・・・

それは、何故なのでしょうか。

ふとコトリの頭に一つの案がひらめきました。

――魔法使いになれないから、マジシャンに憧れてるの？

――それじゃ・・・

「まさか、リアリティ・・・現実って事？」

「流石だねお嬢さん正解だ。
我輩は、“現実”だからこそ不思議な事が何一つ出来ない。魔法の絵本の中に居るというのに
そして出来ないからこそ憧れてしまうのだ。魔法や摩訶不思議な事に・・・な。
だから出来る範囲でマジシャンをやっている。マジックには“種も仕掛け”もあるからな。」

「でも待ってよ！
可笑しいじゃない。マジックは“現実”が本質でも成功できるはずでしょ？」

「ここは絵本の中だろう、お嬢さん。我輩たちが居るこの世界は空想だ。
その中で我輩だけが、我輩の存在だけが“現実”だ。
我輩はこの世界では生きにくい。
本来ならば、この場でのマジックと言うものは相性が悪いものだからな

だが、この世界だからこそマジシャンになりたいと思えたんだろうな・・・」

リトはコトリに一歩近づくと自然な動作で彼女の手を取り掌に口付けると甘い甘い笑みを送ります。
そして、コトリが何らかのリアクションをとる前にリトはコトリの

肩をそっと後ろに押しました。

「えっ？」

「もう、お嬢さんとはお別れしなければならん。」

「まっ、待って・・・」

成す統べなく後ろに倒れるコトリの下には黒く空いた穴
手を伸ばすも、届く事無く掴んだものは空だけでした。

「きっと、お嬢さんなら・・・」

コトリの体はそのまま落ちていき、暗闇に飲み込まれ・・・
そのままブラックアウトしてしまいました。

貴女に懇願のキスを贈ろう
彼の“本質”を見つけられると思っているよ。

Next Page　Chapter02. Fairy Tail

幕間　After side L&R

「ねぇ、リト」
「なんだい？」

しんと静まり返った舞台に二人の声だけが響きます。

「本当にそう思うの？」
「おや、お前はそうは思わんのか？
お嬢さんなら・・・我輩は出来ると思うがね。」

「アタシだって別に出来ないとは思って無いけどね！」

顔を見合わせて二人して楽しそうに笑いました。
“現実”の本質であるリトと似ている・・・
イレギュラーであるコトリに期待しています。

「あの子はアタシの本質も分かったかしら。」
「時間さえあれば、な。
お嬢さんは中々鋭い目を持っているようだから。」

いくら、リトの本質を当てるのが簡単な方とはいえ、短時間で彼女は間違えず言い当てました。
冷静な判断力と思考力は持っているようです。

「そうね！リトもちゃーんとアタシの本質分かってるんでしょうね。

」

「あはは、勿論分かっているさ
お前の本質は“前進”　前向きで、真っ直ぐ進んで行く
いつだって我輩を後押しして、引っ張っていってくれるのだろう？
だからこそ、我輩はマジシャンと言う道を歩いていけるんだ。」

「そうよ！リトにアタシは絶対必要なパートナーなんだからね。
アタシを使ったマジックも成功できるようにしなさい！！」

「そうだな・・・」

少し考えるように顎に手を当てると、逆の手にあるシルクハットと
レネットを見比べて

「やはり、お前がもう少し痩せてから練習する事にするよ。」

そう言ってリトは笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6105m/

×の不思議な魔法の絵本

2010年10月10日02時49分発行